

ウプサラ大学図書館管見の記

熊野 正也*

1 経緯

筆者は、1996年から現在にかけて、ほぼ2年置きに5回ほど、ヨーロッパ各国の主要な古代遺跡や博物館、美術館等を巡ってきた。最初は、大学時代の同窓生等10名ほどの仲間と初めてのヨーロッパ旅行に出かけた。この時は初めてということもあって緊張する場面がたびたびあったが、それは同窓の好ということで、お互いに助け合いながらなんとか無事に旅をすることができた。訪ねたところはギリシャ・イタリア・フランス・イギリスなどの国で、幸いにもそれぞれの国々の著名な博物館・美術館そして古代の遺跡を見学することができた。

中でもこの旅での一つの出来事が、実は以降の海外旅行を続行するための大きな弾みとなったものである。それは、われわれが見学中のアテネ国立考古学博物館最後の展示室において、思いがけない展示資料に出会ったことにはじまる。展示資料は、ドイツの高名な考古学者H. シュリーマンが発掘したミケナイ遺跡出土の黄金マスク「アガメムノン」という遺物であった。

筆者にとってのこのシュリーマンという学者は、大学の1年生の時に読んだ彼の自叙伝『古代への情熱』という一冊の文庫本からいろいろなことを学び、はじめて考古学という学問の魅力を教えてくれた、いわば考古学におけるお師匠さんの一人でもあった。今、目前にある黄金のマスク「アガメムノン」は、正にシュリーマンの文庫本の巻頭を飾っていた写真のマ

*くまの・まさや / 図書館事務部長

スクだった。一瞬、興奮のあまり身震いするような感覚に襲われたことを覚えている。

即刻、われわれ一行は、この「アガメムノン」が出土した遺跡を見学するため、翌日の予定を変更し、アテネから百数十キロメートルも離れたペルポネス半島のミケナイ遺跡へ直行することにした。この遺跡は小さな山頂に位置し、ライオンが浮き彫りされた石門の遺跡としても知られているところでもある。

帰国後、H. シュリーマンの関わったその他の遺跡も、ぜひ見て置きたいという気持ちにかられ、筆者は1998年に旅の友人たちと「ハインリッヒ・シュリーマン」の夢を追う旅に出かけることにした。

写真 1: 古代古墓群ガムラ・ウブサラ遺跡

この旅ではトルコのトロイ遺跡をはじめ、世界でも最古級の図書館があるエフェソス遺跡、ペルガモン遺跡、ギリシャのクレタ島にあるクノッソス神殿・ミケナイ遺跡など、著名な遺跡の見学をすることができた。その後もスペイン・ポルトガルやエジプトなどにまで範囲を広げ、著名な博物館や美術館、旧石器時代の壁画洞窟のピレタ遺跡等を巡ってきた。これらを通じて筆者は、ヨーロッパの石造文化に一種のカルチャーショックを受

けたものである。

そして、今年 2004 年も、北欧を中心にロシアのサンクトペテルブルグやドイツのベルリン・ポツダム・ドレスデンなど約 15 日間をかけて訪ねてきた。

筆者は、特にスウェーデンのウプサラというところの古代古墓群ガムラ・ウプサラ遺跡に興味をもった。いざ、ガムラ・ウプサラ遺跡を訪ねてみると、なかなか壮大な古墓群であった(写真 1)。

普通、ウプサラというと北欧最古のウプサラ大学があるということで有名なところである。われわれは、現地の解説員の説明を聞きながら中世城郭ウプサラ城の一画から大学の広大なキャンパスを俯瞰することができた。ところが、最初に目に映ったのは、[Carolina Rediviva] という文字が付された 3 階建ての建物が見えた。この建物こそが、北欧の歴史と伝統を誇るウプサラ大学図書館であったのである。

写真 2: ウプサラ大学図書館のライブラリーショップ

大学図書館に勤務する一員として、この著名な図書館を見ずしてウプサラ大学を去るわけには行かない。全行程の予定と見比べながら、図書館見学の交渉をしたところ、導入部である一階フロアだけの見学となった。

このフロアには、受付や図書館案内とか絵葉書、ライブラリー・グッズなどを販売する、いわば「ライブラリー・ショップ」ともいべき売店もあった(写真2)。今、この売店で買い求めて手元にある絵葉書と案内書を紹介し、自分で感じ取った感想について述べて見ることにする。

2 ウプサラの位置と略史

ウプサラ (Uppsala) は、スウェーデンの南東部にある首都ストックホルムから北北西約 70 キロメートルの地点に位置する。ウップランド平野を流れるフィール川にまたがっている。人口は約 15 万 9 千人を数える都市で、近年、著名な医薬品をはじめ自転車、オートバイ、靴、絹織物、家具、調度品など国内でも有数の工業都市でもある。

ウプサラの旧名は、アロス、またはエストラ・アロスと呼ばれていた。その発祥の地は、同市の北へ約 6 キロメートル離れた旧ウプサラというところである。旧ウプサラは、古代から中世初期にかけて政治、教育、交易の中心地として栄えていた。1164 年には、そこに司教座が設置されたが、たび重なる大火により、1273 年に現ウプサラに連座された。以来、ウプサラは今日に至るまで、国教の総本山としての位置を占めている(能登 1968)。

やがて、13 世紀のなかごろにストックホルムが首都に定められた後、ウプサラは、政治的に重要な役割を失った。しかし、1435 年に完成した大聖堂や北欧最古の総合大学、古城、植物園、各種の博物館、学校などの存在が往時の市の面影を留めている。

一方、市の周辺に建てられた工場群は、世界的に有名な医薬品のほかに、自転車、オートバイ、靴、絹織物、家具調度品など近代設備による生産が行われ、国内でも有数の工業地帯にもなっている。

3 ウプサラ大学の創設

1419 年、スウェーデン国王エリク 13 世によりウプサラに設立されたが、実質的にはローマ教皇シキストゥス 4 世の認可を得た 1477 年に開校する。

スウェーデン最古の大学であり、北欧最古の大学でもある。創設当時は、世界最古のボローニヤ大学を範としていたが、直接的にはドイツのゲルン大学、ロストック大学を模範としたといわれる。

16世紀には宗教上の論争から2派に分裂し、1588年に一端閉鎖される。やがて、プロテスタント主義の興起とともに大学は再興され、特にスウェーデン国王グスタフ・アドルフ2世の尽力によって隆盛を迎えることになった。英主グスタフ2世は、大学復興のために特に意を用いて、図書館はじめその他の設備の充実に努めた。

スウェーデン国では、11名のノーベル賞受賞者中7名をこのウプサラ大学関係から輩出し、ヨーロッパでも一流大学として確固たる地位が築かれている。また、生物分類法の基礎を確立して世界的に著名な博物学者リンネ(Carl von Linné 1707~78)もこの大学に招かれ教授に就任した。

大学の復興に尽力した国王アドルフ2世は、グスタフ・ヴァサの孫で、軍事的にも天才で国土を保全し、北欧の強国を築く。また、グスタフ・アドルフ5世の息子6世は、このウプサラ大学で考古学・中国美術を学び、皇太子時代に来日し、千葉県市川市の姥山貝塚を発掘するなど知日派として知られる。

ちなみに、大学のユニヴァース・アイデンティティーは、「自由に考えることはすばらしい。だが、正しく考えることはもっとすばらしい」と。

4 一枚のリーフレットから

本学図書館事務部の久松薫子氏にお願いし、和訳していただいたウプサラ大学図書館の1枚のリーフレットからその内容を紹介する(写真3)。

ウプサラ大学図書館は1620年に創設され、1841年に「Carolina」の名で知られる建物に移設したスウェーデン最古・最大の図書館である。

1620年4月に、ヨハン3世の蔵書や諸外国の中世の修道院図書館のものも含まれる膨大な量の図書と写本が、スウェーデン国王グスタフ・アドルフ2世から大学に寄贈された。このすばらしい寄贈のおかげで、ウプサラ大学はスウェーデンの中でラテン中世文学を数多く所蔵する筆頭としての位置を得た。本の寄贈に加え国王は、200スウェーデンドルの毎年の補助

金を図書購入のために創設した。しかし、これはスウェーデン軍隊の戦利品である貴重書を国王が維持するためのものだった。さらに、グスタフ・アドルフ2世の三十年戦争での勝利が蔵書の増加を招いたが、その中で一番の貴重書である銀泥聖書 (Codex Argenteus) は、1648年のプラハの攻撃後スウェーデンにもたらされた。それは当初クリスティーナ女王の書庫に収められ、1654年の女王の退位の後には、オランダへ帰国した女王の司書であったアイザック・ボッシウスの所蔵となった。後に彼はこの聖書をスウェーデン大使で大学の総長であった Magnus Gabriel de la Gardie 伯爵へ売却し、後に伯爵は1669年にウプサラアカデミー図書館へ寄贈した。



写真3: 『Carolina Rediviva』ウプサラ大学図書館

17世紀末までに図書館は3万冊を所蔵していたが、スウェーデンで出版される図書は、当時所蔵価値がないと見られていたため、そのほとんどが外国書だった。しかし、1692年国内の重要な研究教育機関で出版されたものすべてについて1部保存することとされ、1707年には王国内すべての出版物に適用が拡大された。

図書館は18世紀にはより平和的な方法で発展した。スウェーデンの歴史学と地形学関連資料群の Palmskiöld コレクションなどは購入されたが、得たもののうち多くが寄贈によるものである。たとえば Duben の古い楽譜

のコレクションやグスタフ 3 世の書状と公文書を含む、Jacob Cronstedt's Swedish 図書館・グスタフ 3 世写本コレクションなどがある。

19 世紀科学文献の生産は科学、特に自然科学分野での進歩に歩調を合わせてきた。深刻な予算不足にもかかわらず、多くの寄贈と国を越えた交換のおかげで、図書館はかなりの数のこうした文献を得てきた。今日でさえ科学機関間での文献交換は、世界中の他の科学図書館と同様、この大学図書館でも重要なものである。交換するものは、おもに大学の出版物である。

大学図書館には、大学への文献提供すべてについての責任がある。近年、大学図書館は、図書館ネットワークを拡大した。中央図書館である Carolina Rediviva は、人文科学と学際的な分野を扱い、写本・楽譜・地図・印刷物の専門部署を持ち、図書館システムの中心と位置付けられている。ほかの 13 の部局である分館には、人文社会科学センター、法学部、バイオ医学研究所、大学病院、数学情報学センター、科学技術センター、地学研究所、教員研修機関、学習図書館、Gavle の建築住宅研究所などがある。それぞれの図書館には、各専門と関連分野のエリアがあり、その主題の責任を持つ。もともとの図書館部署は、200 ほどであったが、分館にそのほとんどが吸収された。利用教育は、学部と図書館との間で分担され、図書館情報学教育は大学図書館と学部間での協力の一例である。

ウプサラ大学図書館は、国立の図書館データシステムである LIBRIS の一部を担っている。1989 年大学本部の独自のデータシステムである Disa が稼動し、図書館の新しい蔵書の検索と予約が可能となった。Disa システムは、図書館内の末端経由でも大学のネットワーク経由でも利用でき、国が運営するネットワークである SUNET とインターネットとのリンクを通じて、多くのデータベースへのアクセスを提供している。

以上がリーフレットに掲載されている内容である。

5 絵葉書から見た建物の移り変わり

この数枚の絵葉書は、同図書館の売店で買い求めたもので、その移り変わりを示すものである。なお、絵葉書の解説文は、本学図書館事務部の伊

藤朋子氏に和訳していただいたものである。

写真 4: グスタヴィアヌム (ウプサラ大学博物館) ヨハン・ヘルステッド (1756~1820) の水彩画

写真 5: ウプサラ大学図書館の北側から 中央口と階段の吹き抜け。1820 年代の C. J. イエルの設計図より。宴会用ホールの装飾はなされなかった。

写真 6: カロリーナ・レディヴィーヴァ 1890 年代 (ウプサラ大学図書館) A .
ダールグレン撮影 ウプサラ大学図書館の写真コレクションより。

写真 7: カロリーナ・レディヴィーヴァ(ウプサラ大学図書館) コレクションの古い絵葉書による

写真 8: ウプサラ大学 撮影は旅の友人福島昌彦氏

写真 9: 現在のウプサラ図書館 撮影は旅の友人福島昌彦氏

6 ウプサラ大学図書館の特別資料 1、2

ウプサラ大学のバイオメディカルセンター (BMC) に留学されていた神戸薬科大学の山田修平氏によると、「ウプサラ大学の本部図書館はカロリーナ・レディヴィーヴァと名づけられた建物で、日本でいえば国会図書館にあたる重要な図書館である」といい、「スウェーデンで出版された書物の全てが揃っていて、500万冊以上」の蔵書があるという。

しかも、この図書館内には、博物館もあり、羊皮紙や古い製本装置など紙や本にまつわるいろいろな資料が展示され、かつ日本の木版地図まで展示されていたという(山田 2003)。

さて、ウプサラ大学図書館の特別資料は、「シルバーバイブル」と呼ばれる6世紀代の聖書がある。これは世界で唯一残っている純粋ゴート語の聖書で、その名のとおり、銀による装丁が施された美しい本である。この聖書は特別展示室に厳かに展示されている。

また、珍しいものとしては、モーツァルト作曲の「魔笛」第一幕の楽譜が保存され、絵葉書として活用されている(写真 10)。さらに、1555年にアロンソ、デーサンタ、クルズによって描かれたスペイン征服期のメキシコシティの地図(写真 11)があり、よく観察するとスペインの君主に酷使されているインディアンの姿が道に見られる。

写真 10: モーツァルト「魔笛」第1幕 楽譜

写真 11: スペイン征服期メキシコシティの地図

これらの特別資料は、全体の中のほんの一例の紹介にすぎない。しかし、これらの存在は研究・教育に加えたウプサラ大学の顔として、北欧いやヨーロッパ全域にわたってその名を知らしめているということを知ることができた。

今回の筆者の旅は、僅かな滞在時間にすぎなかったが、ウプサラ大学図書館を通じて多くのことを学ばせてもらった。その一つが大学図書館にとっての特別資料はいかに重要であるかということを知らされた。図書館特別資料は、単に図書館だけの資料ではない。大学全体の価値を示す資料であり、その存在価値の大きさに認識を新たにする事ができたのである。

参考文献

- [1] 能登志雄「ウプサラ」『大日本百科事典』小学館 1968
- [2] 山田修平「世界の図書館を訪ねて ウプサラ大学カロリーナ・レディヴィーヴァ」『神戸薬科大学図書館ニュース』 No. 30 2003